【研究発表②】

張 夢鴿「近世初期における柯尚遷の受容―藤原惺窩と林家を中心に」

国立公文書館の所蔵資料の中に、朝鮮儒者の姜沆の手跋本『五経』という 10 冊の写本がある。これは万暦 27(1599 年) に書写されたものであるが、通常の五経のほかに、『曲礼全経』というあまり見慣れない一冊が入っている。著者の柯尚遷(1500～1582)は福建省長楽縣の儒者・数学者であるが、特に数学上の功績は記念すべきものであり、長楽に彼に因んだ学校や記念館などが建立されている。同書は 1672 年に和刻本が出されたが、その後、同書について断片的な記述しか見当たらず、徐々に顧みられなくなったようである。しかし、このほとんど忘れ去られた一書は、近世初期の儒者・大名などから大いに関心を寄せられたのである。本文は主に以下の点から、同書と著者の柯尚遷をめぐってその受容・流布の様相を考察し、同書はどのように利用され、そこにいかなる問題関心が反映されているのかに関して検討することとする。 第一に、1599 年、慶長の役で捕虜となった朝鮮儒者姜沆は但馬竹田城城主の赤松広通の 求めに応して『曲礼全経』を書写し、そして藤原惺窩が書写されたものに訓点をつけた。赤松と惺窩及び羅山や角倉素庵など惺窩の門人たちが姜沆に釈菜などの「祭儀」を学んだ。こ れはのちに羅山の塾、さらに昌平坂学問所につながる。 第二に、惺窩は所蔵本を羅山に借り、「此書之編次、註釋精粹無遺憾」と同書の構造や尚 遷の注釈の精密さを称賛している。そのため、「故周儀之二書、渴心生埃。望梅在此」とあ るように、尚遷が書いたほかの二書の入手を羅山に依頼している。 第三に、それ以降、羅山の著作や講義に尚遷の書が時々登場し、羅山が繰り返し柯尚遷の 著作を読んでおり、あるいは尚遷の説が羅山の中に生き延びてきたと推察できる。 第四に、羅山はのちに「切問近思」を疎かにしてはいけないと、息子の鵞峰を戒めるために、『曲礼全経』を改めて校正し鵞峰に授けた。